

ほほえみ

20世紀もまもなく幕を閉じようとしています。世紀末を迎えふと考えるに、21世紀に向けて一番大事なものはやはり教育ではないかと。今叫ばれる学校の荒廃。いじめ。不登校。校内暴力。これはやがて学校だけにとどまらず社会全体の崩壊を招くのではないかと危惧します。社会性や人間性、道徳教育。当たり前のことをもう一度原点に返って考える必要があるように思います。

人間として当たり前のこと。命の大切さ。人への思いやり。やさしさ。人と助け合って生きる社会。家族。

人間は健康な体、健全な社会を当たり前と思いこんでしまいます。しかし、病気をして明日をも知れない命と知った時、人間として一番大切なものは何か、わかる気もします。

教育はそんな「人として生きる」そこから教えるべきものではないのか。

20世紀に子どもの大病を体験した私は生意気にもそんな風に感じます。皆さんは如何ですか。子どもの病気によってそんなことを感じる私たちは幸せかも知れません。どうぞ良き21世紀をお迎え下さい。

<第66回 ほほえみの会>

師走の忙しい中8人が集まりました。

中学3年生。8ヶ月の治療を終えて年末に退院する。悩みは高校受験。中学で公立ではなく私立に行くように強制される。先生方の病気に対する知識がなく、手続きも面倒だといって公立受験を認めてくれない。

入院中は院内学級で勉強したが非常に良かった。教科は少ないが学級がなければ勉強は断念していただろう。病院にいても学校に通う意識が持てたし、勉強も思ったより遅れることはなかった。

3歳の女の子。10月入院。

8月に発熱。伊豆の大きな病院で血液検査もやってもらっていたのに異常なしと言われ病気がわからなかった。骨髄検査のためにカルテを持ってこども病院にきたらカルテだけですぐに悪性の病気だと診断された。

病院によってこんなに違うのかと驚いた。骨髄検査で詳しい結果が判ったとき、2週間は泣いて暮らした。どうしても悪い方に考えてしまう。夫も食べ物が喉を通らなくなってしまった。

そんな中、夫がアメリカの病院で他より治癒率の高い病院があることを知ったその訳は医師も看護婦も笑顔を絶やさないことだという。それを聞いて以来なるべく笑顔でいようと心がけている。

絶対に治るんだと意識している。

それでも涙は出てくる。子どもの前で泣いているとお母さん泣いてちゃダメ。笑ってといわれる。3歳の子がいつの間にこんなに成長したのかと驚く。子どもに教えられる。また周りの人に支えられていることも知る。病棟のお母さん達も最初はみんな重い病気なのに何でこんなに笑っているのか不思議だったが今では自分にも笑顔が出るようになり、周りの人たちから元気をもらっている。

インフォームドコンセントについて

こども病院では判らないことがあるとしつこいくらいに先生に聞いてもちゃんと答えてくれる。

他の病院では説明がなく、いきなり入院、手術というところも多いという話題も出ました。

次回は 1月14日(日) 時からです

ほほえみの会 代表 池田恵一